

人はいつでも、どこからでもやり直せる。



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第二回は、彌榮自動車のタクシードライバーとして、京都を訪れる国内外のお客さまやVIPを案内する山崎夏子さん。英語とスペイン語を習得し、世界中どこへでも出かけていく行動力を持つ山崎さんですが、学生時代は不登校の時期があり、挫折も多かったとか。後編では、現在のお仕事や大谷で得た多くの学びについて語っていただきました。

仕事を通してより大きく広がった世界



1,000名弱の従業員が在籍する彌榮自動車で7名のみが担当しているジャンボ・ハイヤードライバーとして主に国内外のお客様を案内している山崎さん。

——前編では、先生のサポートのおかげで大学へ行くことができたという話をお伺いしましたが、その頃から今の仕事に就きたいと考えていたんですか？

山崎夏子(以下、山崎) : いえいえ、大学生の終わり頃まではタクシードライバーになるなんて考えていませんでした。強いて言うなら、学生の頃から車の運転が好きで、全国どこへ遊びに行くにも車で行っていたというくらい。でも、長く運転していても飽きないし、何より新しい土地に出かけることが好きなんだと気づいて、じゃあそれを仕事にしたら楽しいだろうと思って選んだのがこの仕事でした。

——当時、会社では初めての新卒タクシードライバーだったそうですね。

山崎：はい。新卒で、しかも女性というのはまだ珍しかったので心配もされましたが、特別扱いすることなく一人のドライバーとして周りと同じように育ててもらえたことは、すごくありがたかったです。この仕事を始めた当初に比べると、今では新卒社員も女性ドライバーも、そんなに珍しい存在ではなくなったように思います。

——英語だけでなくスペイン語も話せるそうですが、どのような努力をされたんですか？

山崎：いつか第三言語を習得したいとずっと思っていたのですが、コロナ禍でタクシービジネスがストップしてしまったとき、この間に何かできることはないかと考えて、日本語教師の免許を取りました。取ったからにはすぐに使おうと思って行ける国を探したら、メキシコとコロンビアの日本語学校に空きがあったので、行ったことのないコロンビアに決めて、そこでスペイン語を習得することができました。今はジャンボ・ハイヤーの運転手として、観光の方やVIPをご案内する業務を担当していますが、私がお乗せするのはほとんどが海外のお客さまです。

——その行動力がすばらしいですね。以前、タクシーに乗ったお客さまの家に招待されたという話もお聞きました。

山崎：そうなんです。海外のお客さまの中には、うれしい気持ちの表現として「いつでもいいから家に遊びにおいで!」と言ってくれる方がいるので、そう言われると私は本当に訪ねて行くんです(笑)。それは、お客さまの住んでいる国の生活や習慣を知るためでもありますし、直接会いに行くという行動は、自分なりの感謝の伝え方でもあると思っています。

——きっと、誰もがそんなふうに家へ招待されるわけではないですね。

山崎 : どうなのでしょう.....でも、やっぱりその人やその国のことが知りたいという気持ちが、私は前面に出ているんだと思います。自分のことを知りたいと思われるのは、海外のお客さまにとってはうれしいことなのかもしれません。つい後先を考えずに行動してしまうところもありますが、まだまだ知りたいことや行きたい国、会いたい人がたくさんいますし、お客さまとも毎回そんな話になりますね。

信じられる人の言葉を、ただ信じてみてもいい



中学の頃は、学校に来れない山崎さんのために、クラスメイトが授業をまとめた「夏子ノート」を作ってくれていたのだとか。

——てっきり、中学・高校時代に英語に触れたことがきっかけで.....というような話があるのかと思っていました。学生時代は、考えすぎて立ち止まってしまうこともあったと思いますが、現在のバイタリティは、早い時期に壁にぶつかったり、乗り越えたりした経験から得られたものかもしれませんね。

山崎：今となっては、あの頃なぜそんなに悩んでいたんだろうと思います。そういった意味で大谷は、人間性のベースみたいなものを築いたところなのかもしれません。中学・高校の頃って、怒られるとまた更に悪いことをしたりするじゃないですか。でも、それでもまだ怒ってくれる人がいるって、実はすごいことなんですよ。決して感情的に怒るのではなく、なぜそれがダメなのか、自分は今どんなふうになる舞わないといけないのか、という話を当時たくさんしてもらって、それは33歳になった今も記憶に残っています。先生たちはいつも諦めずに、「お前ならなんとかできる、今からでもできる」と言い続けてくれました。そのベースがあるから今の自分がありますし、そういう考え方を教えてもらえて本当によかったと思っています。大人になったら、もう誰も怒ってくれないですからね。最後の最後まで怒ってもらえることは当たり前のことではなくて、大谷はいい意味で、すごく過保護でお節介な学校なんだと思います。



——すごく特別な時間だったことがわかります。最後に、大谷中学・高等学校に通っている 生徒や卒業生の中にも、今同じように悩みながら過ごしている人がたくさんいると思います。そんな方たちに山崎さんから伝えたいことやメッセージがあればお願いします。

山崎：私はここで過ごした6年の間、何度も転んでは起き上がって、また転んでは起き上がってを繰り返してきました。生徒会長を務め終わった頃だったと思うのですが、ふいに誰かに言われた「いつでもゼロから始め直せる」という言葉を今でもよく覚えています。何度も地の果てまで落ちたような気持ちになったけれど、その度に、またゼロから始めたらなんとかなるかもしれないと思い、這い上がってきました。学校へ来られない時期があっても、人と違う見た目や中身だったとしても、その違いは決して悪いことではなく、世界に目を向ければ当たり前のことだったりするかもしれません。「人と違っていい」ということを、私は大谷で教えてもらいました。

それから、中学・高校の間は先生がチャンスを与えてくれていて、それを絶対に逃してはいけないということもお伝えしたいです。自分だけで選ぶのも悪いことではないですが、信じてみようと思える人の言葉をただ信じて突き進んでみるのも大切なことなんじゃないかと、私は自分の経験からそう思います。



<PROFILE>

山崎夏子 **Natsuko Yamazaki**

京都府生まれ。大谷中学校、大谷高等学校を卒業し、2014 年京都産業大学文化学部国際文化学科を卒業。彌榮自動車株式会社に新卒ドライバーとして入社し、現在はジャンボ・ハイヤーの運転手として、国内外の観光客や VIP を案内する業務を担当している。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Ayumi Yamamoto